

長倉久子著『トマス・アキナス 神秘と学知
——『ポエティウス「三位一体論」に寄せて』翻訳と研究——』

南山大学学術叢書，創文社，1996年，475+41頁。

渡部 菊郎

出版にまつわる事情はいろいろあるが、この書物ほど「なんざん」であった翻訳書もめずらしい方ではないだろうか。

「あとがき」で著者ご自身が記されているように、本書は著者が大学院博士課程後期の年に、当初聖トマス学院学術叢書羅和对訳の一冊としてとして訳出されるために着手された。その後著者はフランス政府給費留学生として留学され、主にボナヴェントゥラ研究に集中されるようになった。その後、南山大学学術叢書のために出版されることになったが、原著のレオ批判的校定版の刊行を待ちました五年あまりが経った。その間も著者の病気や大学改革の波など、いろいろなことを経てやっと上梓された。

本書は大きく二部に分かれる。第一部は研究編で、トマスによる神学革新—『ポエティウス「三位一体論」に寄せて』の歴史的意義、と題され、第二部は翻訳編でトマス『ポエティウス「三位一体論」に寄せて』全六問題がデッカー版、レオ版との異動や詳細な注が施されながら、時間をかけているだけ丁寧に全訳されている。基本的にはレオ版を定本とし、xi ページに記されている諸点においてデッカー版の編集方針に従っている。

第一部の研究編は二部に分かれている。原著はその執筆年代やトマス（以下、適宜 T. と略記）の註解としての特殊な形態、またポエティウス（以下適宜 B. と略記）の『三位一体論』の序文と六章のうち第二章の前半までのところまでの註解で中断されていることなど、様々な問題がこれまで議論されてきた。訳者の独自の視点は、T. が B. の『三位一体論』を註解するという形式を採りながら、その実「トマス神学序説」ないし「マニフェスト」として著したという推定に立ち、中断ではなく後に書かれる『対異教徒大全』をいわば本論とする神学序説として、それなりに完結していると位置づけているところであろう。

したがって、研究編の第一部（I 神秘と学知）は、歴史的な状況と T. の内面を踏

まあたうえで T. のこの著作の内容を検討している点に特色がある。

1. トマスとボエティウス

西ローマ帝国の崩壊後、ゲルマン諸部族の支配の下に文化的に低迷した中世初期から中期にかけて、B. は異教の古代ギリシャ文化を正当に評価し翻訳によって西欧キリスト教界にそれを伝えると共に、異端説との戦いの中で正当信仰を理性的に擁護するために異教徒の文化的遺産であるアリストテレス（以下 A. と略記）の論理学を積極的に採用した。T. もまた異端説との戦いの中で神学を再考し、諸学の中に神学を位置づけ、神学の主題と方法を明らかにして、正統信仰の顕示を試みたのであった。

2. ボエティウス『三位一体論』について

B. の生涯と著作を、正統信仰を奉じるカトリック教徒のローマ人と異端のアリウス説を奉じるゲルマン民族という宗教と絡んだ民族の対立、政治の動きを概観し、「最後のローマ人」にして「最初のスコラ学者」とも呼ばれる彼の歴史的 position を明らかにし、「聖なる小品」と呼ばれる四編の神学的小品のうちの『三位一体論』という著作の歴史的 background を B. が後同じく死刑に処せられたシュンマクスに「二人だけの秘密の書」と献じたことなどから示し、更に、『三位一体論』の内容と後世への影響に言及する。

3. ボエティウスからトマスへ

カロリング・ルネサンスをへて、11世紀後半から12世紀にかけて論理学への関心が深まると共に、B. に対する関心は高まり、12世紀ルネサンスから B. が背景に退いてゆく。そこで T. の A. による「新しい論理学」による教育方法や自然発生してきた大学、福音主義運動とその中で起こった教父達の著作の原典の導入などの文化史的意味を探り、T. の課題はなお生成過程にある「大学」という研究教育の場で神学の主題を位置づけ、その方法を他の諸学問と対比しつつ明確化しようとするものであったとみる。

4. 「神学」の革新者トマス

まず T. の生涯においては、A. を禁止したバリでなく、ナポリで学んだことや自然学・論理学の素養、バリでのアルベルトゥス・マグヌスとの出会い、在俗司祭との確執に注目し、彼の著作の紹介がなされる。T. の特徴は正統性と革新性が見事に融合し具体化していることであろう。

5. 『ボエティウス「三位一体論」に寄せて』

著者は、T. の用いた方法は『命題集註解』で用いた、区分と章に分けその順序に従いながらも、自らの思想を問題形式で異論・反対異論・解答ないし主文・異論解答という形式で提示する組織だった体系的な神学書であるとする。組織だった体系的著作、レオ版の校定者も *Expositio* ではなく *Super Boetium De Trinitate* としている。それが訳者の「寄せて」と訳出する理由である。

執筆年代に関しては自筆原稿として保存されていることもあり、大学の教育活動の外で著された書である。B. の序文と六章のうち第二章の前半までしか扱っていないから未完の書であろう。第一回パリ大学時代後半の時期、命題集註解を脱稿した後の1256年から、『対異教徒大全』が書きはじめられる1259年までの間のいつかと推定される。T. が「大学における」神学の教授として活動するためにぜひとも明確におきたいことがらであったのであろう。B. の神学的著作に注目した神学者は T. 一人であったが、『デ・エンテ』で見いだした存在の問題を『デ・ヘブドマディプス』を註解しつつ平行して研究されたのではないか。特に「多の原因」をめぐる第四問題の位置づけを、従来の新プラトン主義的な論理的概念的な方法と決別して、自らの神学を、経験主義的自然学的研究を土台としてそれを越える形而上学によって打ち立てようとしていることの表明とみる。

研究編の第二部 (II. 「新しい神学」への道程—全六問題の歴史的的位置) において著者は、研究第一部で扱った歴史的問題と著者の視点から全六問題を歴史的背景をも含めて解説註解してゆく。紙数の関係から以下問題のみを列挙すると、

第一問題 神的なことがらの認識について

第二問題 神の認識の顯示について

第三問題 信仰の推奨に関することらについて

第四問題 複数性の原因に関することらについて

第五問題 観照的学の区分について

第六問題 ポエティウスが観照的諸学に帰属させている諸方法について

付録としてロエブを定本とした B. 『三位一体論』——いかにして三位一体は一なる神であって三神ではないのか——の翻訳がある。

第一問の照明説の論駁によって能動知性は神から個人に自然本性的に与えられているが、原因としての神は被造物を全く超越し、否定を通してしか認識されないこと、などは第五、六問題への布石となっている。第二・三問題では、A. の「学知」に従っ

た「聖なる教え」が扱われる。学には前提となる知があり、神学の場合、啓示する神への信頼によって信仰箇条を受け取り、これを原理とし前提とする。しかし信仰が出発点であることは、学知の出発点・源泉が知性認識であるということに反することはない。信仰箇条は論証できないが、反駁する人達には論証的に否定することもできないことを示し擁護し、比喩によって説得し納得させることはできる。しかし、理性によっては論証も論駁もできない信仰の対象を、推論によらず直知的に理解すること（知解）が神学の終局目的であると言う。そして信仰の普遍性、必要性、帰依（レリギオ）の意味などが扱われる。

第四問で T. は、B. が数的多の原因が附帯性であると主張する根拠としてあげた「二つの物体は同時に同じ場所を占めてことはできない」という言葉をめぐって、質料・物体・場所の関係を明らかにする。自然学の対象となる質料、抽象化されない質料的存在者は、三次元の元にあるもの（物体）であり、この三次元的あり方こそ場所を生じさせるものである。T. は問題の位相の区別に注目しており、後の学知の対象の位相の相違と方法の相違を念頭においているのであろう。

第五・六問ではアリストテレスに従った、自然学、数学、神学という学知の区分を人間知性の認識の抽象の段階性などから区分し、学知獲得における理性と知性の関係に言及し、自然学の推論的な方法と神学の直知的な方法を学知獲得における能力の相違から解釈し、数学の学習的な方法を学知の確実性の方から解釈し、学知獲得における感覚と表象ないし想像力の役割を問題にしている。

七、「新しい神学」の構築に向かって

ここで著者は今までの考察を踏まえ、T. の全著作活動における本書の位置を定めてゆく。信仰は理性的でなければならない。しかし、最終的に信仰は理性を越えるものへの承認であって、この承認は人間の全体に関わって来る。帰依（レリギオ）という身体も含む人間の全体的なあり方や、正統信仰を奉ずるもの共同体・交わり（コムニオ）としての教会、この世の善への関わりなど人間の全体性に注目する神学を構築しようとし、神学者は信仰の真理を顕示することのみならず、信仰の誤謬を排除することをも責務とする。T. の50年に満たない生涯は全てそれに捧げられたと著者は結んでいる。

確かに著者のいうように「T. のマニフェスト」と言えるようなところもあり、T. の神学体系の全体像が見えてくる。勿論アリストテレスをはじめとした様々な註

解を経て T. の思索は深化してゆくので全体像が全てみえるわけではないの言うまでもない。特に個体化の問題など後にまた再考されていく。

第1部の研究編は B. と T. の思想史的な考察を主に扱っているが、中世哲学一般へのよき入門ともなる。懇切丁寧な解説とあいまって T. 自身の手になる T. 哲学へのよき入門書であるともいえよう。

待ちに待った本書の刊行は、これから中世哲学を志す者たちにとってもよき指標を与えることになろう。御出版をお祝いし、著者の研鑽の跡に敬意を表するとともに、ご健康とこれからの更なるご研究の進展を心からお祈りするばかりである。

田島照久著『マイスター・エックハルト研究
——思惟のトリアーデ構造 esse・creatio・generatio 論——』

創文社、1996年、xxxii+379+22頁。

川 崎 幸 夫

本書の狙ひを通観するために、「あとがき」における説明を採用するならば、著者はエックハルトの思惟にみられる独自性を「存在・創造・誕生」の重り合ふ「トリアーデ構造」と名づけ、これを解釈することが「エックハルトの思想の全体的眺望を獲得するのに有効」であると確信した上で、三様の視法にしたがって展開される思惟が「相即連関し、問題互換の動的関係において統合されている」境域に向けて薫直向前提せんとする意欲を逆しらせてゐる。著者の姿勢は極めて大膽卒直であり、馬上試合に臨むが如き気概には深く共感させられる。

著者はエックハルトの主著といふべき『三部作』の「命題論集」において第一命題に挙げられた「存在は神である」を拠所として神の本質をまづ存在に見出し、一切の被造的存在の神に対する絶対的な依存性がスコラ哲学全体を振り返ってみても比類なきほどに至るまで徹底されていることに着目してゐる。更にこの第一命題は、「創世記」の冒頭つまり聖書全体の冒頭に置かれ、また「ヨハネ伝」の冒頭でも意図的に反復された「始に」(In principio)の一句の解釈とエックハルト自身によって深く呼応させられてをり、著者はこれに立脚して存在論を直ちに始原論と照応させ、また存在